
研究概要

Ⅰ はじめに

令和3年(2021年)度より中学校で全面実施となる学習指導要領では「コンテンツ・ベースの学力観」から「コンピテンシー・ベースの学力観」への転換が図られている。その趣旨について、解説総則編¹⁾では以下のように述べられている。

今回の改訂においては、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて加速度的に進展するようになってきていることを踏まえ、複雑で予測困難な時代の中でも、生徒一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることができるよう、教育を通してそのために必要な力を育んでいくことを重視している。

また改訂の背景として、主に2つの側面から学校教育の今日的課題について言及している。1つ目は、生産年齢人口の減少や、人工知能(AI)の進化に代表される技術革新や社会構造などの変化といった、今後ますます予測が困難となる時代を迎えていることである。そして、このような時代にあって、学校教育には子どもが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められていると述べている。他方で中央教育審議会答申²⁾によると、現在の子どもたちには、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べることについて課題があり、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識の低さが見られることが指摘されている。そして、これからの社会を創り出していく子どもたちにとって、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくための資質・能力とは何かを明確にした上で、子どもが学習内容を人生や社会のあり方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために、「どのように学ぶか」という学びの質を重視した、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が1つの目標として掲げられている。

2つ目は、学校内における教員の世代間のバランスの変化に伴い、教育に関わる経験や知見をどのように継承していくかということである。教師の仕事は職人技として例えられることもある。年齢構成の中でも特に多い40代~50代の教員が大量に退職していく時代にさしかかると、教員個々の努力に委ねるだけでは限界があり、学校内においても互いの経験や知見を伝え合い、教師の技能を継承していく研修機能が一層重要になると考える。中央教育審議会答申³⁾においても、教員の年齢構成の変化によって先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況にあることが指摘されている。そして教育委員会と大学の連携協力を含めた学び続ける教員を支えるキャリアシステムの実現や、学校においては「チーム学校」の考えの下、校内研修などの研修の機会を活用しながら、学校作りのチームの一員として組織的・協働的に諸課題の解決のために取り組む専門的な力について醸成していく必要性について述べている。こうした状況は、本校も例外ではない。

一方、国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書(平成29年8月29日)において、附属学校については、附属学校園の研究成果が地域や全国で十分に活かされていないことや、大学・教職大学院の教育・研究への貢献・協力が不十分である等の指摘があり、モデル校とし

での役割の一層の見直しが迫られている。見直しが迫られる中であっても変わらない附属学校の使命の1つは、実験的・先導的な学校教育を推進し、地域における指導的モデル的な役割を果たすことである。

先述の通り、今日的学校教育の課題として、教員の年齢構成の変化があり、これまで先輩から伝承されてきた教育技術や経験が引き継がれていかないという懸念がある。本校においても地域のモデル校としての存在意義を一層発信していくことを目指し、附属学校の使命を全教員で再確認した。そして、北海道教育大学や北海道教育大学教職大学院（以下、大学・教職大学院という）と連携した研修を行ったり、札幌市教育委員会主催の教員研修において他校参観や講座開設などの連携を深めたりするなどして、これからの研究のあり方を模索しているところである。

II 本校の研究で大切にしたいこと

1. 本校の教育目標と「共創の学校」

本校では、「清新・進取・斉正・親和」の4つの言葉を学校教育目標としている。生徒が学校教育目標に親しみをもって学校生活を送ることができるように設定され、本校の教育活動において日常的にこれらの言葉が取り上げられている。

〔附属札幌中学校のめあて〕

- ・清新—いつも生き生きと、心と体をはたらかせましょう
- ・進取—なにごとにも積極的に、自ら進んで取り組みましょう
- ・斉正—品位と正義を重んじ、けじめのある中学校生活を送りましょう。
- ・親和—人々との交わりに喜びをもち、ともに向上することをめざしましょう

また、上記の学校教育目標を支えるものとして、以下のように定義された「共創の学校」という語がある。これは研究主題「共創の学校を求めて」（平成12年度～平成15年度）で定義されたものである。

子どもが生き生きと、喜びを持って学びの場に臨み「活動的で、協同的で、自己理解に基づいた学び」を中心に、自らの学びを創り上げる（学びの共創性）と同時に、子どもの「学び」にかかわる生徒、教師、保護者、地域・社会の人々が有機的につながり、「子どもの学びの姿」を中心に、学び合い、高まり合い、相互に機能していく（学びの共創体）ことのできる場としての学校。

研究紀要第46集より

ここで示されている、生徒が他者と積極的に関わり合い、自ら学びを創り上げ、共に高まっていくとする学びの姿は、現在も本校において大切に受け継がれている。

2. 本校研究における「学び」と「学び合い」

これまで本校研究では、「学び」と「学び合い」を分けて定義している。「学び」は、子ども一人一人のもつ自由な発想によるものをはじめとして、学校教育にとどまるものではなく、社会におけるもの、つまりは生涯にわたっての行為と捉え、平成25年に次頁のように再定義した。

「学びとは」

自らの成長の欲求に基づき、対象の本質を探り、自己に取り込み、さらなる成長を目指し続ける行為

また「学び合い」は、「学び」の過程において「学び」を深める手段の1つとして他者との関係性を重視したものであり、同じく平成25年に以下のように再定義した。

「学び合い」とは

自他の考えや価値観に影響を与える相互作用のある学びの過程

「学び合い」の成立に向かうための生徒の姿

【自分と他者をつなぐ】

学習課題や解決の方向性を共有している

【自分から他者へ】

自分の考えをもち、他者に表現している

【他者から自分へ】

他者からの表現を受け入れ、自分の考えを広げようとしている

ここで触れられているように、本校では学び手である生徒自身の主体性を大切にし、生徒が自他の考えや価値観に影響を与え合う中で行われる「学び合い」を、教員だけでなく生徒自身も大切にしている。これらの定義については、今次研究においても研究の基盤になるものとして捉えていくこととする。

Ⅲ 今次研究の歩み

今次研究では、前次研究の課題や本校生徒の現状を踏まえ、授業を通してどのような姿に育ってほしいか、育むためにどのような授業ができるかという授業のあり方に関する研究を行っていくことを全教員で共通理解した。また、それを具体的に進めていくために全教員で議論し、互いの思いを共有することや、議論された内容を踏まえ、各教科の授業実践を通して研究を推進していくこととした。

また教員だけで研究に関する話し合いを進めるだけではなく、大学・教職大学院との連携のもと、講演を行っていただいたり、研究授業にも参加していただき、専門的な立場から助言していただいたりする機会を設けた。このような機会を設けることによって、研修を基にした研究のあり方も模索した。今次研究を進めるにあたり、前次研究の成果と課題を次頁に示す。



【全教員で議論を進める様子】

1. 前次研究の成果と課題

前次研究「自己を拓き、協創する生徒の育成—『自律』と『共栄』に向かう学び・『学び舎』の創造—」（平成28年度～平成30年度）は、各教科等の授業において『自律』と『共栄』に向かう学びを展開するだけでなく、『学び舎』の創造において総合的な学習の時間の刷新や学校全体のカリキュラム、地域や社会、大学等との連携のあり方を考え、求める生徒の姿である「自己を拓き協創する生徒」の育成に迫ることを目指した研究だった。

自己を拓き、協創する生徒

自他の理想の姿を描き、その実現に向けて自ら他者や対象に働きかけ、互いのよさを活かしながら、新たな知を創り築き上げ、自己を更新していくことができる生徒

「自律」と「共栄」に向かう学び

互いの成長を支え共に活かし合い、学びの見通しをもちながら、解決の方法を計画したり資源（他者・道具・知識）を選択したりすることを通して知を獲得し、自ら学ぶ意欲を生み出す学び

「学び舎」の創造

教育課程全般に関わるカリキュラムの構築に加え、大学との連携や地域や社会との関わりなど、大きな枠組みの中での学校のあり方。一授業で育てることのできる力には限りがあるが、その身に付けた力をつなぎ発揮する場を保障する学びがあることや、その力を継続的に積み上げていくことができるカリキュラムの構築、様々な「ひと・もの・こと」と関わり合い、新たな価値を生み出すことができる環境が必要であると考えたことによる。

『自律』と『共栄』に向かう学びでは、全教科・領域において学びの見通しをもちながら、解決の方法を計画したり資源を選択したりすることで課題解決へ向かう授業を継続実践した。また実践を通して、生徒が知の獲得を実感し、自ら学ぶ意欲につなげるためには、生徒自身による自らの学ぶ過程の「省察」とともに、「省察」した内容を教師や生徒が活用することの必要性が明らかになったことも、前次研究の成果の1つといえる。

また『学び舎』の創造では、全学年の総合的な学習の時間を、「社会参画力」を柱として一新した（1学年「リアライズ」、2学年「リフト」、3学年「リレイト」）。また全学年で総合的な学習の時間を中心とした単元・題材配列表や、社会参画力との関連を示した年間学習計画を作成した。教科等横断的な視点に立ち、「社会参画力」を柱としてカリキュラムを整理することができたことが大きな成果の1つである。

前次研究を終えて挙げられた主な成果と課題は、以下の通りである。

- 互いのよさを活かし合い、仲間と共に問題を解決することの価値を強く実感しながら知を創り上げようとする姿勢が育まれた。
- 課題を解決するための方法を考え計画したり、資源を選択したりしながら知の獲得を実感することができ、その力は授業だけでなく、委員会活動などでも見られるようになった。
- 自分や自分と関わる集団のみならず、社会の発展のためにという目的意識をもつことに課題が見られた。
- 他者と学び合うことの価値を実感している一方で、自分の学びが仲間に影響を与えるという自信や実感をもつことができていない。

前次研究の成果や課題から改めて本校生徒の現状を捉えると、集団の中で仲間に積極的に関わり合い、課題を解決することの価値を実感している様子は伺える。しかし課題として、以下のことが浮き彫りになった。

生徒側についての課題

自分の学びが仲間に影響を与えるという自信や実感をもつまでには至っていない。つまり、生徒一人一人、すなわち「個」の姿を捉えたとき、他者に頼ってしまい、受け身になったり自ら率先して行動したりすることに課題がある。この課題を「個」の弱さと捉える。

教員側についての課題

日々の実践を振り返ったとき、集団の力の作用によって課題の解決へ至ったことが多々見られ、生徒個々の思考過程や成長の様子などを十分に見取ることができていないのではないかと。

2. 今次研究の進め方と内容

前次研究を踏まえ、生徒側、教員側双方の認識から、「個」の弱さに向き合い、生徒一人一人の学びに着目することの必要性が課題として挙がり、今次研究が歩み始めた。

(1) 本校生徒の現状の姿と育成を目指す生徒の姿についての検討

日 時	9月5日(水)	9月26日(水)	10月10日(水)
方 法	ワークショップ形式によるグループ討議、および全体交流を行う。		
内 容	<p>【現状の主な長所】</p> <p>生徒一人一人が高い向上心を有していることや、他者を尊重し、他者と関わって協働性を発揮することができるなどのよさが見られる。</p> <p>【現状の主な課題】</p> <p>既存の知識を活用して新たなものを創り出すことや、自らの考えに自信をもって一步を踏み出すことなどに課題があり、集団の力に依存してしまう生徒が見られる。</p> <p>【育成を目指す生徒の姿】</p> <p>現状の課題を克服した理想の姿として、自分の頭で考え判断する生徒、固定観念にとらわれずに創造性を発揮する生徒、自らを信じていることができる生徒、合意形成ができる生徒などが挙げられた。</p> <p>【結果と今後について】</p> <p>改めて「個」の弱さが確認される結果となった。また、今次研究は授業のあり方を対象とした研究を進めることが確認され、次回以降は授業を通して育みたい生徒の姿や力について議論を進めることになった。</p>		

はじめに、現在の本校生徒のよさや課題、そして中学校3年間、あるいは将来にわたってどのような生徒に育ててほしいか、という視点で議論を行った。図1は、その際に各グループで議論された内容をまとめたものである。議論の際には我々が日常の授業や日々の関わりの中から感じることを、広くそして飾ることなく話し合うことを心がけた。話し合いの中で、課題解決の際に他者に頼ってしまい、受け身になっている姿や、自ら率先して行動することに課題が見られるなど、前述の生徒の現状

と同様の課題である「個」の弱さが再確認された。

そこで、上記の内容を基に、全体で「～の生徒」という共通した表現ができるようにカードを用いて現状の課題を克服した生徒の姿についての考えを深めた。各グループからは「自分の頭で考え判断する生徒」「自分でできたと思える生徒」「新たな疑問を生む生徒」「創造性豊かな生徒」など、多くの意見が出された。そして出された意見の共通項を探り、図2のように分類していった。新研究の方向性を探る議論で挙げられた本校生徒の課題と同様に、「自分の頭で考え判断する生徒」「自分でできたと思える生徒」という意見が出され、多くの教員が共通した認識をもっていることを全員で共有した。

なお育成を目指す生徒の姿に関する議論においては、授業場面を中心として捉えるグループや、広くカリキュラム・マネジメントに関わるものも含めて考えるグループがあったことから、今次研究は授業のあり方を対象とした研究を推進していくこととし、改めて授業を通して育みたい生徒の姿や力について議論を進めていくことになった。

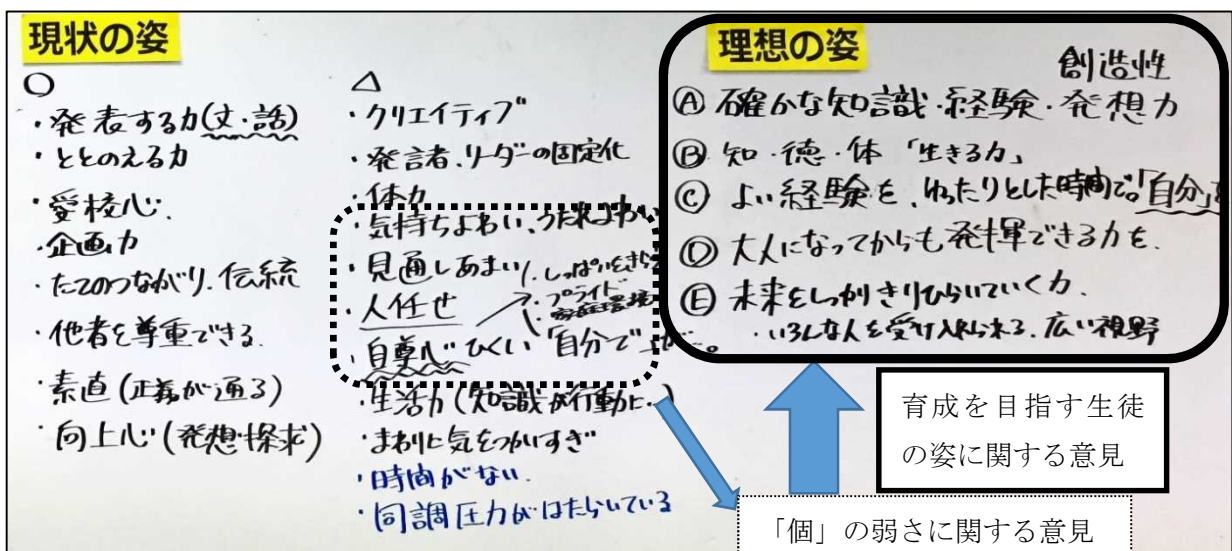


図1：本校生徒の現状の姿と育成を目指す生徒の姿のまとめ

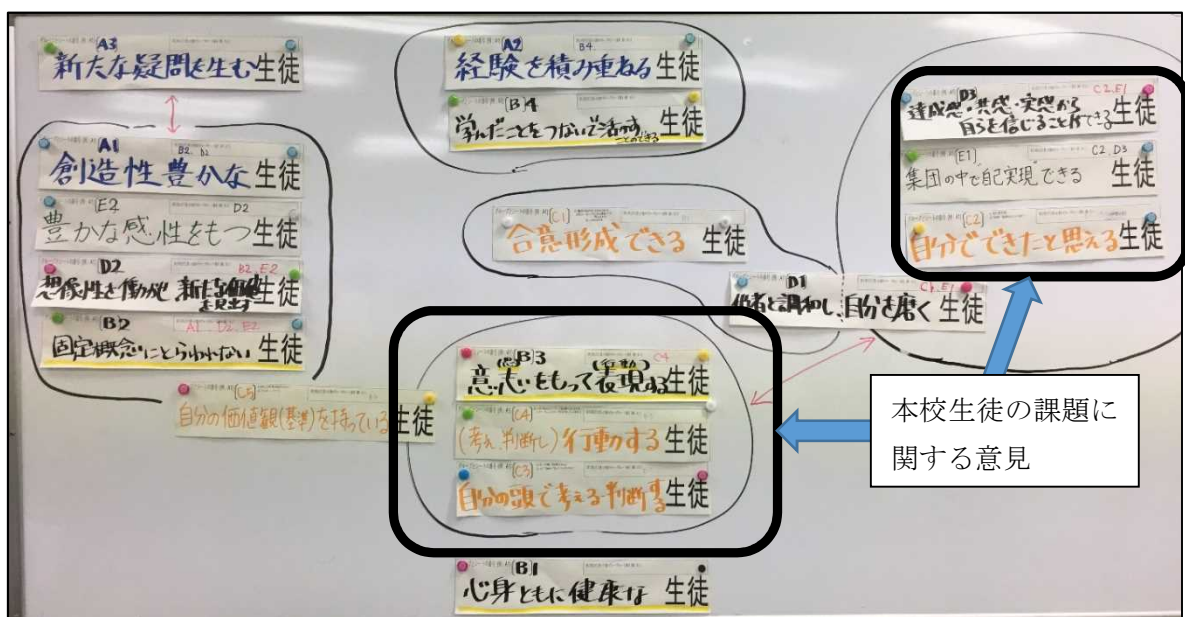


図2：議論を通して分類された「求める・理想とする生徒の姿」

(2) 授業を通して育みたい生徒の姿や力についての検討

日 時	10月24日(水)、11月7日(水)
方 法	ワークショップ形式によるグループ討議、および全体交流を行う。
内 容	<p>【授業を通して育みたい生徒の姿や力に関する意見交流】</p> <p>「学ぶことに価値を見いだすことができる生徒」「固定観念にとらわれない発想力のある生徒」「自分で考え、判断し、行動できる生徒」など多岐にわたった。</p> <p>【結果と今後について】</p> <p>意見の集約の中で、再び議論の中心が「個」の弱さに移った。そして今後は「個」を育むことに焦点化し、どのような「個」を育みたいか、集団の中で「個」を育てていくために授業においてどのような工夫が必要かについて議論を進めることになった。</p>

育成を目指す生徒の姿に関する議論の後、授業を通して育みたい生徒の姿や力について意見を出し合った(図3)。「授業における『理想の姿』」というテーマで議論を始めたが、議論を進める中で、理想の姿を授業で見られる姿に限定すると、我々が掲げる目標としては狭いのではないかという意見が出された。また、「姿」だけではなく、「力」に関わる意見も出されたことから、議論の途中でテーマを「授業を通して育みたい生徒の姿や力」に修正した。

様々な意見の共通項を話し合ったり、何を大切にしていきたいかなどについて交流したりすることでイメージが少しずつ絞られた。と同時に、前次研究の課題やこれまでの議論において何度か指摘された「個」の弱さに対する指摘が改めて出された。そこで、話し合いを「個」を育むことに焦点化することとし、どのような「個」を育みたいか、集団の中で「個」を育てていくために授業においてどのような工夫が必要かについて、全教員が先行研究や各々の実践を振り返ることで考えをレポートにまとめ、次の議論は各々の教員のレポートを基に行うという方向性を確認した。



図3：各グループから出された授業を通して育みたい生徒の姿や力

(3) 「個」の何を育むのか、育むためにどのような授業ができるかについての検討

日 時	11月22日(木)、12月12日(水)、12月19日(水)、1月11日(金)、1月23日(水)
方 法	<ul style="list-style-type: none"> ・11月22日にワークショップ形式によるグループ討議、および全体交流を行う。 ・前回の議論を受け、全教員が先行研究や各々の実践を振り返って考えをレポートにまとめる。レポートのテーマは「①個を(も)育むとはどういうことか」、「②個を(も)育むためにどのような授業ができるか」、「③これからの研究の進め方」の3点とする。 ・12月19日、1月11日にレポートを基に再びグループ討議、および全体交流を行う。 ・1月23日、全体でのこれまでの討議を踏まえた今後の研究の進め方の確認
内 容	<p>【「個」の何を育むかについての議論】</p> <p>新学習指導要領で明記される資質・能力の育成を図った上で、一人一人が考え判断し、行動できる「個」を育む必要があること、「個」を育む方法として学びに対する「主体性」に着目するなど、今次研究の目的や研究目標につながる内容が確認された。</p> <p>【結果と今後について】</p> <p>生徒一人一人が考え判断し、行動できる「個」を育てていく必要があるのではないかという認識に至り、「個」を育むことを今後の研究の目的とし、研究の方法として学びに対する「主体性」に着目することが確認された。</p>

全教員が先行研究や実践を振り返ってまとめた考えを基に、まずは育みたい「個」についてカードに記入して共有した。そして「個」の何を育むのか、育むためにどのような授業ができるかについてグループ討議を行った。本校生徒の現状やこれからの社会を生きる生徒に求められるイメージについて、教員それぞれが強い思いをもっているため、出された「個」の内容は「主体性」、「自ら学び続ける意欲」、「自分で行動する力」、「自己効力感」など多岐にわたった。

再びこれらを基に共通点を探ったり、意見交流したりすることを通して、**本当の意味で「個」が育まれているといえるのか、もっと生徒一人一人が考え判断し、行動できる「個」を育てていく必要があるのではないかという認識**に至った。そして「個」を育むために学びに対する「主体性」に着目して研究を進めていくという方向性を確認した上で、全教員による授業実践や過去の授業分析を行った。なお、「主体性」の解釈については研究者によって様々だが、あくまで一般的な意味である「自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動する態度や性質」(大辞林 第三版)と捉えることとした。

(4) 学びに対する「主体性」に着目した授業実践・授業分析と大学・教職大学院との連携

日 時	1月30日(水)、2月20日(水)
方 法	<ul style="list-style-type: none"> ・1月30日に学びに対する「主体性」に着目した授業に関してグループ討議を行う。 ・2月20日に2名の教員による授業を全教員で参観する。また、大学・教職大学院の教員にも参加していただき、拡大した学習案に成果や課題を書き込みながら授業討議を行う。
内 容	<p>【授業討議の結果について】</p> <p>授業において生徒が学びに対する「主体性」を発揮していたかどうかという視点から振り返りが行われ、各教科の特質に応じた見方・考え方の重要性、学習課題を自分事として捉えるための工夫、生徒が課題に向き合って試行錯誤する時間の確保、学びに対する葛藤などが大切であることなどが確認された。</p>

上述の全教員による授業実践においては、2月20日(水)に2名の教員による全員参観授業を実施し、その際には北海道教育大学札幌校の前田賢次准教授、北海道教育大学教職大学院の川俣智路准教授、姫野完治准教授、梅村武仁特任教授に参加いただいた。また、授業後のグループ討議においては、専門的な立場からのご助言をいただいた。なお、梅村特任教授からは、今次研究の方向性が「個」を育むことに焦点化されていく過程だった平成30年10月に、生徒を育む授業とはどのようなものかご講演いただき、大きな示唆をいただいた。また姫野准教授からは、すでに平成29年9月に、授業研究の方法の1つである授業リフレクションについてご講演いただき、我々の授業実践を振り返ったり、生徒の姿を見取ったりする上で大いに参考にさせていただいた。

グループや全体での討議を通して、学びに対する「主体性」に着目して、「個」を育む授業をつくるためには、教科のねらいを外さないために見方・考え方を働かせることが欠かせないこと、生徒が学習課題を自分事として捉えるための工夫、生徒が課題に向き合って試行錯誤する時間の確保、学びに対する葛藤などが大切であるということが確認された。

図4：拡大した学習案を用いた授業の振り返りの一例

また、以下は授業討議を終えた後に大学・教職大学院の先生からいただいたご助言の一部である。学びに対する「主体性」に着目した研究を進めていく上で、我々が大切であると認識していたことを後押ししていただけるような示唆や、新たな気づきが得られる有意義な時間となった。

<p>【学習課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 主体性とは生徒自身が「こうしたら学べるな」というのを把握できることである。それによって自分自身で学びを修正していくことができる。 主体性を発揮するには「自分の内面で目標を定め、様々な方法を考えて、選択して、解決に向かうこと」が大切。 <p>【個に応じた支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒それぞれに学びのつまずきが違う。だからこそ、一律に解決するのではなく、それぞれが解決できる支援が必要。 <p>【問題設定等】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「方法の多様性がある」「解が1つではない」「選択性がある」という設定をすることが、生徒が自ら決定して課題に向き合うことにつながる。
--

(5) 実践や分析を終えて

日 時	2月27日(水)、3月6日(水)
方 法	全教員が行った授業実践や分析についてのレポートを持ち寄り、「個」を育むための学びに対する「主体性」に着目した授業に関するグループ討議を行う。
内 容	<p>【結果について】</p> <p>教師側の手立てに関わる内容を5つに整理した。また学びに対する「主体性」に着目することは、「個」を育むための方法の1つになり得るのではないかという意見交流の結果から、今次研究の1年次においては、「主体性」に着目した授業づくりを模索することになった。</p>

全教員が授業実践や分析を通して、「個」を育むために学びに対する「主体性」に着目した授業には何が必要だったのかという視点から意見交流を行った。また授業で生徒が「主体性」を発揮して学びを進める姿や将来にわたって「主体性」をもって学び続ける姿とはどのようなものかについても意見交流を行った。図5は、その際にまとめられたものである。

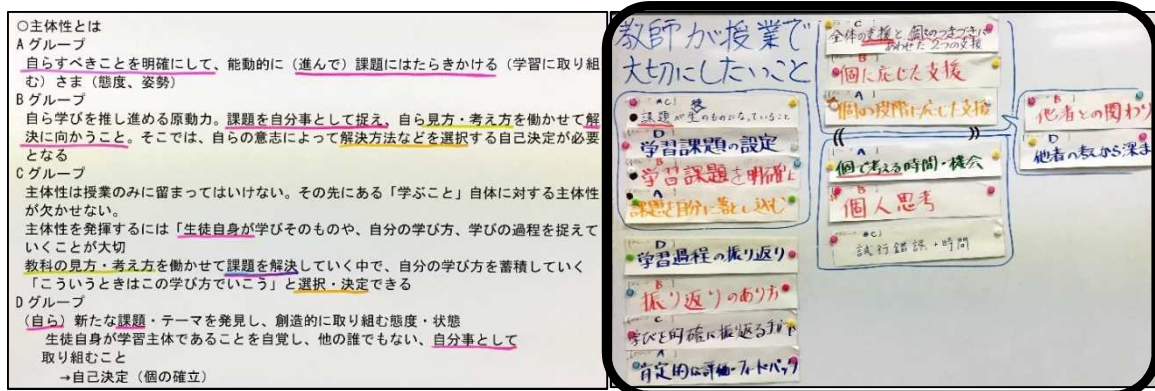


図5：各グループの「主体性」のとらえ方と学びに対する「主体性」に着目した授業に必要なこと

我々が行った授業実践や授業分析などで明らかになった生徒の姿を基にして議論を進めてきたことで、授業において生徒が「主体性」を発揮して学びを進めるとはどのようなものかについて共通認識を深めることができた。そしてこれまでの話し合いなども踏まえて、教師が学びに対する「主体性」に着目した授業で大切にしたいこととして、次の5点が導き出された。

教師が学びに対する「主体性」に着目した授業で大切にしたいこと

- ① 学習課題の設定に関すること
- ② 学習課題を追究し続ける工夫
- ③ 個や段階に応じた支援
- ④ 他者との関わりに関すること
- ⑤ 振り返りのあり方

このような新研究の方向性を探る議論を経て、学びに対する「主体性」に着目することが、「個」を育むための方法の1つになり得るのではないかという意見交流の結果から、今次研究の1年次においては、「主体性」に着目した授業づくりを模索していくこととした。

今次研究の方向性

今次研究では一人一人が考え判断し、行動できる「個」の育成を目指すこととする。またそのための方法として、1年次は学びに対する「主体性」に着目した授業づくりを模索することとする。

IV 今次研究の目的および方法

1. 研究の目的

新指導学習指導要領では、各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせて資質・能力を育成し、「生きる力」を育む先にあるものとして、現在の生徒一人一人が将来の予測困難な社会に主体的に関わり、他者との協働を通して自ら切り拓き、未来の創り手となっていくことを目指している。本校生徒は本校が伝統的に大切にしている「学び合い」のよさを理解し、他者との協働によって解決に向かう姿が見られるものの、他者に頼ってしまい、受け身になっている姿や自ら率先して行動することに課題がある。このような課題を我々は「個」の弱さと考える。従って本校生徒の現状における課題の1つである「個」の弱さについての解決に向かうことが、資質・能力をより豊かに育成し、将来においては未来の創り手となることができると考える。そこで、特に各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて資質・能力をより豊かに育成するとともに、自ら判断・行動し、未来の創り手となる個を育むことを目指すことを今次研究の目的とした。

自ら判断・行動し、未来の創り手となる個

生徒自身が将来にわたり、一人一人が考え判断し、自信をもって行動し、他者と協働しながら創造し続けようとする。

また、今次研究の方向性を探る議論や授業実践の分析を行う中で、学びに対する「主体性」に着目していくことが、資質・能力をより豊かに育成し、個を育むための方法の1つになり得るのではないかという実感に至った。実際、守屋⁴⁾は「主体性」は子どもに身に付けさせるのではなく、子どもの中から

湧き出てくるものであるとし、「学びの主体」として自律しているからこそ、他の子と協働して学んだり、自分の意志で判断し、選択したりする自律した人間になると述べている。そこで、今次研究の目的に迫るために、学びに対する「主体性」に着目し、以下の研究目標を設定した。

研究目標 1：特に授業を通して個を育むことを目指して、生徒が主体性を発揮して課題解決に向かう授業のあり方を考え、実践する。

研究目標 2：生徒が主体性を発揮する授業を継続して実践することによってどのような変容が見られたかを、大学・教職大学院との連携を基に分析・検証する。

2. 研究の方法

(1) 研究目標 1 の実現に向けた具体的方法

図 5 における授業場面で「教師が大切にしたいこと」で挙げられたことを基に、生徒が「主体性」を発揮するための手立てを講じることとする。その際に講じる手立ては、以下の 5 点の工夫のいずれかを踏まえたものとする。その上で授業実践を行い、生徒がどのように「主体性」を発揮していたかを授業場面における生徒の姿やワークシートの記述等から検証する。

授業において、生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせるようにするとともに、以下の 5 点の工夫のいずれかを踏まえた手立てを講じ、実践することとする。

ア 生徒が学習課題を自分事として捉えるための工夫【**学習課題**】

イ 生徒が試行錯誤しながら学習課題を追究し続けるための工夫【**課題追究**】

ウ 全体の支援および個に応じた支援のための工夫【**支援**】

エ 個人が考えを深めるための他者との関わり方の工夫【**協働性**】

オ 生徒が学びを的確に振り返るための工夫【**振り返り**】

(2) 研究目標 2 の実現に向けた具体的方法

各教科・領域における授業を継続したことでどのように生徒が変容したかを捉えるため、以下の 2 点の方法で検証する。

① 学習アンケートの結果の比較

今年度の 5 月、および秋頃に同様の項目によるアンケートを実施し、その変容について分析する。そのための統計的手法として平均値、分散値、項目間の相関の算出、および分散分析を行う。分散分析において有意差が見られた場合、多重比較検定を行う。また考察にあたっては、北海道教育大学教職大学院の川俣智路准教授に協力いただく。

② 授業における生徒の見取り

・ワークシートの記述等の変容

教科・領域の特質に応じて課題に取り組んだ内容や振り返り欄などの記述を記録し、変容を見取る。

以上のように、今次研究は前次研究の成果や課題、日常の実践における生徒の姿などを教員全体で改めて振り返り、生徒の現状の課題点や求める姿を共有し、どのような授業実践ができるかを考えながら、研究の方向性を探ってきた。特に1年次は学びに対する「主体性」に着目し、各教科・領域の特徴を活かしながら実践を行うことで、研究の目的に迫っていきたい。これは、新学習指導要領で求められる「主体的・対話的で深い学び」をより具現化することにもつながる。また、実践から成果や課題を見だし、2年次には改めて研究の目標を見直しながら、自ら判断・行動し、未来の創り手となる個の育成により近付けるような授業のあり方を模索していきたい。

本研究紀要や研究大会などの実践をご覧いただき、ご意見をいただけると幸いです。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』、2018年
 - 2) 中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』、2016年
 - 3) 中央教育審議会答申『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について』、2015年
 - 4) 奈須正裕『子どもを学びの主体として育てる～ともに未来の社会を切り拓く教育へ』pp.1-52、守屋淳（編著）「子どもが主体になるとはどういうことか」、ぎょうせい、2014年
- ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第46集、2000年
 - ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第59集、2013年
 - ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第60集、2014年
 - ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第61集、2015年
 - ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第62集、2016年
 - ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第63集、2017年
 - ・北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第64集、2018年

今次研究の全体構造

学校教育目標

清新 進取 斉正 親和

2年次以降の研究目標（研究の重点）
これまでの実践を検証し、再検討しながら方向性を決定する。
なお、今次研究は3年間の継続研究を基本とする。

研究目標（1年次の研究の重点）：学びに対する主体性に着目した授業を通して
研究目標1：特に授業を通して個を育むことを目指して、生徒が主体性を発揮して課題解決に向かう授業のあり方を考え、実践する。
研究目標2：生徒が主体性を発揮する授業を継続して実践することによってどのような変容が見られたかを、大学・教職大学院との連携を基に分析・検証する。

研究の目的

自ら判断・行動し、未来の創り手となる個の育成

生徒への願い

将来にわたり、一人一人が考え判断し、自信をもって行動し、他者と協働しながら創造し続けようとする生徒になってほしい。

生徒の現状

学校教育の
今日的課題

附属学校の
役割